
修了生通信

あしはら

2020年3月

部落解放・人権大学講座
2019年度 修了生通信

差別を支えない一人になるために

部落解放・人権研究所 理事 松村 元樹

今日の差別問題は、インターネット上が「主戦場」になっていると言っても過言ではありません。最近、特に「同和利権」「在日特権」に続き、「男卑女尊」「LGBT特権」「アイヌ利権」「障害者特権」「外国人特権」などの表現を用いた、マイノリティへのあるべき社会包摂を非難し停止させようという動きが強まっています。こうした問題が生じる背景には、マジョリティの中から「新たなマイノリティ」がつけられる社会構造があります。

弘文堂から出版されている『新たなマイノリティの誕生～声を奪われた白人労働者たち』では、これまでいわゆる「中流層」にいた「白人労働者」というマジョリティが、不平等感や格差の問題以上に「剥奪感」を持つようになったことで「マイノリティ化」をしている状況がアメリカ社会で起きていると指摘しています。今では先進国で共通して起きていると言われており、日本でも前述したような主張がネット上で顕著に見られるようになってきました。

具体例を示すと、女性の社会進出・登用を拡大させていくことにより「男性」の昇進のチャンスがなくなり、苦しい生活から脱却できなくなるため、ジェンダー研究や女性対策を攻撃・非難する。障害者の権利保障の取組みには「健全」者の雇用機会が減る、外国人労働者の受け入れには「日本人」の働く場が奪われる、性的マイノリティへの社会包摂には「異性愛者やシスジェンダー」が、「アイヌ民族」への社会包摂には「アイヌ民族以外」が、「マジョリティである自分は、マイノリティへの社会包摂のような営みを受けることができない」と考え、さ

らに、「生活が楽になる、豊かになるチャンス」をマイノリティによって奪われている・奪われようとしている」と「剥奪感」を抱き、ナショナリズムとつながることで、多様性の尊重に反する、不寛容な社会がつけられてきていると私は受け止めています。

こうした「剥奪感」という考え方が出てくる要因の一つに、解放大学の講師でもある出口真紀子さんのお話にあったと思いますが、「特権」についての学びの欠如があると受け止めています。例えば、幼少期、両親がいる家庭で育った、学費を保護者が全額負担してくれた、学習塾に通っていた、明日の食事を心配したことがない、保護者が大卒、保護者に非識字者がいないなども、努力して得たわけではない経済的・文化的特権です。この条件に該当しない人は、該当する人よりも不利な位置からスタートすることを余儀なくされています。努力だけでは乗り越えられないことが現実に根差し続いています。

知ることを止めず、新たな問題を生み出す社会構造を的確に捉え、その変革に取り組む主体をマジョリティの中から増やさなければなりません。解大修了生の皆さんの役割は修了後にこそ高まっていくと思います。

ネット上を含む差別や社会問題を解決するために、これらの問題を意識できる「居心地の悪いところ」に身を置き続け、「差別を支えない一人」として、今の自分にできることを着実に積み上げ、ともに寛容な社会の実現に向け取り組んでいきましょう。

22年ぶりの同窓会

55期

55期(1997年修了)では、2019年6月16日、天王寺の飲食店で22年ぶりの期全体の同窓会を行いました。55期52名中15名、当時の事務局1名の計16名が昼12時30分から3時間余り、宴に最後まで全員帰らず、新たな参加者名簿も作成され、集合写真を撮り、笑顔で無事?に帰路されました。参加者全員の自己紹介でわかったことは50代1名、60代10名、70代4名、80代1名で、仕事は50代1名は現役、60代4名は現役、年金生活者11名とのことでした。その後、30分ごとに2席ずつ移動していただき、人生の語らいをしていただきました。また、元事務局の加藤さんからは、自ら作成された「高齢者は交通弱者でもある」とのテーマで、A4の6枚の解説をいただき、先生の飽くなき社会探究にしばらくアルコールを止めることが出来ました。内容は、昨年の交通事故死1347人中、1003人は65歳以上の方が占め、先進5ヶ国の国際比較では日本以外が約20%、日本は倍以上の51%。また、WHO統計で健康年齢が英71.4歳、独71.3歳、仏72.6歳、米69.1歳、

日本74.9歳で、平均寿命とも日本が高いので、車の事故の加害者、被害者にもならないよう気をつけてくださいとのエールでした。お互いに気をつけたいものです。金融庁の平均寿命まで生きるには2000万預金してくださいキャンペーンともup to dateのお話であったので、70歳の先生のお話は団塊世代の一人のお声としてお読みいただければ幸甚であります。

さて、今回はいつかは不明ですが、80歳を3つ超えて参加、また、呼びかけた人のうれしいお顔を拝見しますと、私もその歳までとの決意をされた方は私だけではなかったことは、最後の記念写真での皆様の楽しい笑顔からもご理解いただけると思料します。

(文：当日の司会 64歳男子)



番町と蛸池でフィールドワーク

109期

解大109期修了生(2015年12月修了)は、神戸・番町地域のフィールドワークを、2019年6月22日に第7回修了生研修会として、14名の参加で取り組みました。フィールドワークでは「新湊川」、湊川高校、金楽寺、丸山中学校西野分校(夜間中学校)跡、障がい者共働作業所「くららベーカリー」などを訪ね、多くの学びがありましたが、紙面の都合上「差別の

川」と呼ばれる「新湊川」の歴史と番町の関係について、報告させていただきます。

集合場所である地下鉄の駅の階段を昇った私たちは、番町支部とひょうご部落解放・人権研究所の方々の案内で、まず「新湊川」の不思議な光景に出会う。その川はこんもりとした山のトンネル(湊川隧道・会下山トンネル)から流れ出し、神戸の坂に抗うように西に向かって東西に流れている。

神戸は山地が海岸まで接近しており、河川は海に向かって概ね北から南へとまっすぐ流れているのが普通だ。このことから「新湊川」は、付け替えられた人工河川であることが見てとれ

る。しかも川沿いを歩いてゆくと、両側の護岸に著しい高低差（北・山側が高く、南・海側が低い）がある事がわかる。南側の護岸の下にはさらに大きな段差があり、土手が平家の屋根を超える「天井川」となっている。まさにそこが番町地域である。

こうした地域は、ひとたび大雨が降り続くと浸水し、伝染病が蔓延することもある。川の付け替え以降、北側が床下浸水までいたらないような小雨であっても、地域の人々は水害の恐怖で夜も眠れない。

新湊川の付け替えは、1896（明治29）年から工事が始まり、1901（明治34）年に完成する。この期間は日清・日露の二つの戦争には含まれた時期である。当時富国強兵・殖産興業を国是とした明治政府は、鋼鉄製の大型船舶を急増させる必要があり、神戸港に川崎造船所や三菱造船所の建設を急いだ。しかし、湊川がこれまでのように和田岬に流れ込めば、土砂で神戸港が埋まってしまう。1000トン以上の軍艦や巨大貨物船を進水するには11m以上の水深を確保しなければならない。これが旧湊川埋め立て（「新開地」の誕生）の真相であった。

また、折しも1896（明治29）年の大雨で、元々「天井川」であった旧湊川が氾濫・神戸駅一帯が浸水し、都市機能が停止する事態が発生し、これを機に新湊川付け替え工事は一気に進められた。旧市街を通す案もあったが、住民の反対で廃案になり、番町地域の人々を犠牲にする現行のルートが採用される事になる。

被差別部落が犠牲にされた典型例であり、土地の人たちが「新湊川は差別の川」と呼ぶのは、まさしく本質をついている。

戦後、部落解放同盟が番町地域に誕生し、護岸をはじめ水害との闘いが、生活改善要求の中心に組織されるのは必然と言える。

私が、何も知らない観光客であれば、新湊川の川縁は涼やかな散策路でしかなかっただろう。無知は、真実を覆い隠し、人を差別の構造を補強する側に立たせる事を私はあらためて胸に刻んだ。



会下山（えげやま）トンネル付近で説明を受ける

※上記はひょうご部落解放・人権研究所編集・発行『人権歴史マップ』（2014年3月発行）の「新湊川と番町」（文：登尾明彦）の文章を、ほぼ全文引用し再構成しました。

（文：109期 山崎さん）

第8回研修会は蛍池で

つづいて、2019年12月7日（土）には第8回修了生研修会を豊中市の蛍池地域にて実施。修了生と解大事務局の川本さんの計10名弱の参加メンバーが阪急宝塚線蛍池駅に集合。講師の前田勝正さん（蛍池支部長）と合流して、天候に恵まれた約1時間のフィールドワークの後、蛍池人権まちづくりセンターで前田さんから地域の歴史や現状、体験談をご講話いただいた。

前田さんは80歳を超えておられるが、矍鑠とされている。この姿はどこから来るのか？若き頃の理不尽な差別、今でもネットなどに残る差別、それらに向かい合ってきた体験を伝え残そうとする思い……。事前の資料に、「人は部落の歴史を学ぶという。学ぶべきは部落を差別してきた歴史ではないのか。」という前田さんのご提言にその答えの一端を感じた。

当日、私が印象に残ったのは、「今はネットで差別が拡散されているが、隣保館の向かいの土地が売りに出されたらすぐに売れた。利便性の高い場所だと隣保館の向かいでも売れる」と

のお話。他人の差別に無関心で、自己の利便は優先する現代社会の問題を考えさせられた。

その後、場所を移して前田さんも交えた懇親会を行った。懇親会から合流した参加者も含め、交流は自ずと任意で二次会へとつながり、解大受講時代から変わらない美酒に酔う中高年の出現で有意義な時間は幕を下ろした。

(文：109期 森田さん)



地域の隣保館にて前田さんのお話を聞く

日之出地域で第3回研修会

111期

2019年11月22日（金）日之出地域にお伺いした研修会には22名の参加がありました。

集合は新大阪駅の「千成びょうたん」前。今回の研修目的「あわじ寺小屋」の大賀喜子理事長のご案内で、駅から東海道新幹線の高架に沿って、5分程で地域に到着です。

話はそれますが、今回の研修にあたり、かつて大阪府内小中学生に配布されていた「にんげん」に掲載されていた文章を思い出しました。

「なあ、新幹線って知ってるか。『夢の超特急』ってやつや。僕らの住む地域（通う学校、だったかも）はその真下にある。」ここに住む小学生が地域や日常生活を紹介する内容ですが、本当に真下でした。何しろ、新幹線の高架により地域が分断されたそうですから。

フィールドワークは、高架の北側の共同墓地、南側の崇禅寺などを案内いただきました。

崇禅寺は、市街地にあることを忘れるような広いお寺ですが、太平洋戦争中の空襲の被害により、境内で多くの遺体を吊ったそうで、慰霊塔や戦没者の碑が建立されています。

また、昭和33年には、隣接する地域から同じ町名に変更することを拒否された「地番変更

差別事件」があったこともお聞きしました。それは、以前の111期修了生研修会で伺った北芝地域と住吉地域でも、隣接地域との間に、同様の歴史があったことと重なりました。

その後、元の西淡路小学校を活用した子どもの居場所「あわじ寺子屋」にて、再び大賀喜子理事長から活動内容をお聞きしました。子どもたちや保護者にとっては、学校以外にも居場所があり、学習支援もある場所の存在は大きな安心となっていることでしょう。

後半は、山中多美男さんと大賀正行さんから、これまでの活動を振り返ってのお話をいただきました。大賀さんからは、解大50周年記念（2024年）には祝いましょう、というお言葉をいただきましたことも報告いたします。

最後の懇親会には大賀正行さんも出席いただき、1年ぶりの再会を楽しみました。

(文：111期 修了生幹事会)



向野・道祖本での研修会

113期

はじめての修了生研修会は向野で

2019年6月8日(土)、羽曳野市の向野地域にてフィールドワークを行いました。113期のフィールドワークと言えば「雨」。この日も天気予報は「雨」でしたが、開始時間までに雨が上がり一時は晴れ間も出て傘いらずのフィールドワーク。解大を3月に修了したばかりで3か月しかたっていないませんが、研修当時に培った「自分事」感覚が蘇ってきた半日でした。

地元の塩谷幸子さんとの互いの自己紹介タイムの後、施設見学へ。林さん、靱山さんにご案内いただきました。加工工場での「枝肉」→「ブロック」への「割る」、「さばく」(殺すというコトバは使わない)工程を説明いただきました。自分の背丈より大きな「枝肉」と呼ばれる「牛の半身」に圧倒されました。ミートセンター内の畜魂碑は、運搬効率が悪くなるにもかかわらず、「命をつなぐ」ことを第一義とし、センターの敷地の真ん中に設置したそうです。

食肉業を取り巻く状況として、仕事は朝早く始まり、お昼過ぎには終わるが、大変な力仕事であり、それだけでは生活できないのでダブルワークは当たり前ということ、1日100頭以上加工していた昔は浄化処理が間に合わず、川が赤く染まり特有の臭いがあったことなど、現場でなければ実感できない貴重なお話をいただきました。

青少年児童センターでは、地域の小学生の作成した「ミートセンターの銅板レリーフ」や「全国水平社宣言の木製ブロックの彫刻」などを見学。銭湯「ひかり湯」では、脱衣場での赤ちゃん用簡易ベッド(男女共設置されているのは、子どもは家族全員で、また、地域で育てるという精神)や手すりなど高齢者にも利用しやすい工夫、供養湯という法事で貸し切りができる「ふ

るまい酒」ならぬ「ふるまい湯」の慣習などを教えていただきました。

最後に、あいあい保育園では病後時保育(病気の子どもの安心、母親の就労支援)の取り組みについて紹介いただきました。「働き方改革」や「女性の活躍」が世間では謳われていますが、このような取り組みがクローズアップされ、発展することが大事だと思いました。

隣保館に戻った後の塩谷幸子さんのお話では、さまざまな気づきがありました。「人権の学びは自分のため、おのれ自身を振り返る時間」、「肉をさばく人が差別されると言うのであれば、食べる人は共犯」、「差別に中立は無い」、「世に向野を知ってもらい、差別が表面化することはあるが、それでこそ処方箋が出せる」、などの言葉が印象的でした。

その後、近所の懇親会場へ移動、焼肉と「かすうどん」で親睦を深めました。懇親会では次の企画案も出され、次回につながる有意義な研修会となりました。

(文：113期 市原さん)



第2回研修会を道祖本にて

つづいて、12月14日(土)には、113期修了生の第2回目の研修会を茨木市・道祖本(さいのもと)地域で行いました。天気にも恵まれ、また数日前までの寒さも和らいで絶好のフィールドワーク日和でした。

参加者(なんと14名!)の皆さんは遅刻することなく定時にスタート。まずは地元の福田憲和

さんの自己紹介があり、早速地域内にある「茨木モスク」へ向かいました。

イマーム(先生の意味)であるモフセン先生から、イスラム教についてのお話がありました。イスラム教ではお祈りと月が密接に関係しており、ラマダン断食中、月が見えなかったら断食が続くということでした。そのほか、クルアーン(コーラン：経典)にまつわる様々なお話も聞いて、我々がイスラム教のことを知らなさすぎであり、知らないが故の偏見をもってしまうということを痛感しました。

続いて福田さんに、フィールドワークマップをもとに、「長屋跡地」、「スワンベーカーリー(障害者雇用)」、「市営住宅」などを案内いただきました。地域の中の道は狭く、消防活動が困難とのこと。いわゆる「部落産業」はないそうですが、隣接する茨木カントリークラブで働く人が多く、またプロゴルファーも多いそうです。先述のモスクがあり、コリア国際学園という、国際バカロレア認定校の各種学校が2008年にできるなど、マイノリティが集い、人権意識を高めるきっかけの多い地域ではと感じました。

さいごに、「豊川いのち・愛・ゆめセンター」にて、和田守さんのお話を伺いました。「土地

が多いが地主ではなく、小作人だったのでお金はなかった」、「自分たちだけではなく、周辺地域や同じ課題を持つ方みんなが安全や利便を得られるような要求をしてきた」、「寝た子を起こしても差別を見抜く力をつけよ」などの言葉が印象的でした。

研修終了後はJR茨木駅近くの懇親会場へ移動。焼き鳥で親睦を深めました。年2回の取り組みを定着させようとの意見や、次の企画案も出され、有意義な研修会となりました。

(文：113期 市原さん・和田さん)



モスクの前で

住吉にて第1回研修会

114期

2019年10月19日(土)、114期修了生(2019年3月終了)として第1回目の研修会を大阪市・住吉地域で実施しました。修了生16名に加え、助言者としてお世話になった田村さん、部谷さん、解大事務局の川本さんも含め、計19名の参加となりました。

集合場所の住宅集会所では、はじめに住吉隣保事業推進協会の友永健三理事長より「住吉部落の歴史とまちづくりを中心とした部落解放運動の歩み」と題した講義を1時間ほど頂きまし

た。現在の地域の概況から、鎌倉時代まで遡った地域の歴史や解放運動の歴史に関するお話をお伺いし、長い歴史の中でたくさんの方々の解放に向けた努力によってまちづくりが進み、人と人のつながりを大切にしたい町が作られていったことが分かりました。また、インターネットの発達などの影響もあり、まだまだ消えない差別との闘いがあることも同時に学びました。

講義のあとは、住吉隣保事業推進協会の藤本さんに案内頂き、フィールドワークを行いました。緑がたくさん集合住宅を見ながら、保育所、福祉センター、生活支援センター、隣保館、閉鎖された青少年会館や交流センターの跡地などを見学させて頂きました。雨が降った後だったこともあり、大量の蚊と格闘しながらと

なってしまいましたが、たくさんの施設を見学させて頂くことができ大変有意義なワークとなりました。個人的に特に印象に残ったのは、隣保館を見学させて頂いた際に老若男女問わずたくさんの地域の方々が利用されており、遊びやお話などたくさんの交流を深められていたことでした。推進協会の方や地域の方が一体となって活動をされてきた成果が表れているのだなと感じました。

フィールドワークの後には住吉隣保事業推進協会の友永健吾常務理事から協会の事業（取り組み）について紹介を頂きました。識字教室や子ども食堂等、様々な活動を通して地域交流の活性化を図られていることが分かりました。特に子ども食堂では単に食事を提供するだけではなく料理教室も兼ね、子どもたちが自ら作るという形態をとっており、食育や生きる力を育むということも同時に行っているということに感心しました。

そして研修会後は天下茶屋に場所を移して意見交流会（懇親会）を行いました。研修会の

参加者のみならず、都合により研修会に参加できなかった修了生の方や、講義を頂いた友永理事長にもご参加頂き、受講生時代やその後の話に花が咲き、大いに盛り上がりました。また次の研修会も開催予定ですので、出会った同窓生という繋がりをこれからも大切にしていければ幸いです。ご参加頂いた皆さん、ありがとうございました。

（文：114期 角島さん）



同窓会総会をおこないました

解放大学は1974年に第1期が開講。2019年度の第115期までの45年間で、のべ397団体、5,419人もの方々に受講いただいています。

2014年には開講40周年を記念して、解放大学の全体の同窓会が発足。現在は2年に1度、総会と講演会を行っています。

2019年6月20日に第4回目となる同窓会総会を大阪人権博物館・リパティホールで行い、33人の修了生に参加いただきました。

同窓会の乗本副会長と当研究所の谷川代表理事の挨拶の後、事務局より、修了生研修会や交流会の実施状況、修了生通信「あしはら」や、月1回ペースで配信している同窓会メールなど、この2年間の活動報告をしました。

役員に関して、2014年の発足時からご就任いただいていた宮会長と乗本副会長のご退任と、新たに堀井会長、部谷副会長のご就任を提案し、承諾いただきました。

今回は、2021年度に第5回目となる総会、講演会を行う予定です。

※改訂された規約と総会のより詳しい報告は、当研究所ウェブサイトの「解放大学同窓会」のページに掲載しています。



「いつも人権について考える」再びソウルへ

～海外人権スタディツアー報告～

私たちは、2018年3月に修了した第112期生です。国内外を問わず、人権スタディツアーを続けています。2018年1月にはソウル、3月には台湾、6月は神戸刑務所へ。2019年6月には京都にある柳原銀行記念資料館を見学。そして、9月には2泊3日の日程で再びソウルを訪れました。

仁川空港に到着早々、人権学習モードはいったんリセット。まずは市民憩いの場所・清溪川（チョンゲチョン）を散策し、不夜城と呼ばれる東大門市場（トンデムンシジャン）で買い物を楽しみ、夕食はもちろんサムギョプサル（韓国式焼肉）を堪能。夜は、全身を麻布で巻き付けながら100度を超えるドーム型サウナを体験。さらに薬草風呂に入り、体を芯から温め老廃物を排出し、美容と健康も手に入れ、エネルギーをフルチャージ。

翌日、パワー全開で学びモードに。国立中央博物館とハングル博物館を見学しました。その後、今も伝統的な風情が漂う仁寺洞（インサドン）で美肌を手に入れるべく韓方茶をいただきました。夜は、前回の訪問の際、お世話になった青少年活動センターの職員と喜びの再会。日本からのお土産の中に、解大で作成した3人の自由課題研究レポートも添えました。解大で学んだ日々が懐かしく思い出されたひとときでもあり、より一層、会話が弾みました。

夜遅くまで熱く議論を交わすうち、青少年活動センターの職員が視察予定先の植民地歴史博物館の事業管理者であるNGOの職員と旧知の仲であることがわかり、案内役の交渉まで買って出てくれました。深夜の無理難題なお願いにもかかわらず、NGOの職員は「ケンチャナヨ（大丈夫ですよ）」。

翌朝から早速、同博物館を案内していただきました。私たちの唐突で無知な質問にも真摯に答えていただき、気づけば3時間を経

過。さらに昼食もご一緒しました。初めての出会いでありながら、快く受け入れてくださったことに感謝するとともに、人と人とのつながりの大切さをあらためて実感。日本での再会を誓った私たちは、次回必ずアニョハセヨ（こんにちは）、カムサハムニダ（ありがとうございます）以外の言葉で歓迎しますと約束しました。これからはずっと交流が続き、互いの平和を築ければいいなと思っています。

私たちのテーマは「いつも人権について考える」。共に学び続けたいという思いを常に大切に、人権スタディツアーを続けていきます。

※ 昨年に続き、112期A班の清水さん、博多さん、吉川さんの3人によるスタディツアーの様子をご報告いただきました。（文は清水さん）



植民地歴史博物館前で記念撮影